

2024 年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	COVID-19 流行による遺族の精神面への影響
キーワード	①COVID-19、②遺族支援、③精神的影響

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏 名	イノウエ ユミコ 井上 由美子
配付時の所属先・職位等 (令和6年4月1日現在)	純真学園大学 保健医療学部 看護学科 講師
現在の所属先・職位等	同上
プロフィール	看護師免許取得後、急性期病院で看護師として従事。2015年九州大学大学院医学系学府保健学専攻看護学分野修士課程修了。2017年より教員として、大学で看護師を養成する基礎教育に従事。2024年4月より現職。 入院してくる患者さんだけでなく、そのご家族、医療スタッフも様々な困難を抱えながら日々の生活を送っています。これまでの看護師の経験を活かし、困難を抱えている方々の負担が少しでも軽くなるように支援の在り方を検討していきたいと思っています。

1. 研究の概要

再び予測される感染症流行時の遺族支援を検討するため、COVID-19 パンデミック中の遺族の状況と抑うつ症状および心的外傷後成長 (PTG) との関連を明らかにすることを目的とした。本研究は、COVID-19 流行下に大切な人を亡くされた遺族に対して行った。対象者に「COVID-19 パンデミック中の遺族の状況」と「抑うつ症状」および「PTG」に関する質問に回答してもらい、多変量解析を行った。結果として、感染に不安があった人、配偶者・パートナーを亡くした人が抑うつになりやすい傾向があった。医療者との関わりに満足している人、医療者や近所の人のサポートがあった人は PTG 得点が高い傾向にあった。再び予測される感染症流行時の遺族支援は、特に配偶者・パートナーを亡くした遺族に対して、満足できる故人とのかかわりの提供とともに社会的サポートの重要性が示唆された。

2. 研究の動機、目的

COVID-19 は 2019 年 12 月に中国の武漢市で確認され、爆発的に世界中に感染が拡大した。日本では COVID-19 流行下において、人との距離を保つこと、密集・密接・密閉を避けることが推奨され、医療施設ではさまざまな感染症対策、面会制限などを行い、患者が亡くなる際も直接看取ることができない遺族が多くいた。大切な人を亡くするという経験は、人生で最もストレスフルなライフイベントの 1 つとされており、心身に様々な反応が起きる。このような反応は「悲嘆」と呼ばれる。COVID-19 パンデミックに伴う行動制限がかけられたことにより、遺族の長期の深刻な悲嘆、心的外傷後ストレス、抑うつ、不安は増加したことが報告されている。

日本人は感情表現が控えめで、親類縁者などと親密な関係をもっている。また葬儀などの儀式は遺族の立ち直りの助けとなり、心身の状態が回復するための猶予期間となっている。この

ような特徴がある日本では、COVID-19 パンデミック中に周囲のサポートが得られなくなることは遺族の心身の状態の回復を遅らせるのではないかと考える。喪失に対する脅威あるいは喪失に直面して引き起こされるパニックの状態は危機といわれる。危機は不安定な事態ではあるものの、重要な転換点としての意味があり、脅威の側面と飛躍をもたらす好機の側面の2つの側面をもち、成長を促進させる可能性がある。本研究は、再び予測される感染症流行時の遺族支援を検討するため、COVID-19 パンデミック中の遺族の状況と脅威の側面である抑うつ症状および好機の側面である心的外傷後成長との関連を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の結果

調査はA県およびA県近郊在住の遺族に対し、WEB アンケートを実施した。調査項目は「大切な人を亡くした遺族の状況」「抑うつ症状」「心的外傷後成長（PTG）」「対象者の背景」とした。

対象者は、男性 59.3%で、年齢は 40 代・50 代で約 50%を占めた。故人との関係は親 34.3%が最も多かった。故人と同居していた遺族は 13.1%であった。故人は、男性 52.45%で、年齢は 80 代以上が 54.2%と最も多かった。死因はがんが最も多く 28.0%、亡くなった場所は病院が 65.4%と最も多かった。喪失の時期はワクチン接種が始まった 2021 年 3 月以前 38.3%、2021 年 4 月以降 61.4%であった。

大切な人を亡くした遺族の状況として、70%以上の人に感染の不安があった。故人の生前における抑うつ症状との関連は、「感染の不安がある」「故人と話げできた」「医療者とかかわる頻度が増えた」で抑うつ傾向を示した。故人との死別後では、「故人とのかかわりに満足している」で抑うつになりにくい傾向を示した。対象者の背景では対象者の年齢が 60 代以上であること、配偶者・パートナーに比べ親、その他（友人他）を亡くした人は抑うつになりにくい傾向を示した。PTG との関連では、故人の生前の「療養環境に満足している」、死別後の「医療者とかかわりに満足している」「近所のサポートがある」「医療者のサポートがある」で成長の傾向を示した。一方、生前の「感染の不安がある」「故人と話げできた」では成長しにくい傾向があった。

再び予測される感染症流行時の遺族支援は、特に配偶者・パートナーを亡くした遺族に対して、満足できる故人とのかかわりの提供とともに社会的サポートの重要性が示唆された。



4. 研究者としてのこれからの展望

今後も少子高齢化が進む日本においては社会保障費の確保が困難になる可能性もあります。人々が健康的な生活を送れるような支援を考えるとともに、病気を持ちながらも生活のため、治療のために働く必要がある方々の支援も考えていきたいと思っています。

5. 支援者（寄付企業等や社会一般）等へのメッセージ

この度は、女性研究者奨励金のご支援を賜りまして心より感謝申し上げます。ご支援を賜りましたことは、研究を遂行するにあたりこの研究が意味のあることだと思え心の支えとなりました。今回取り組んだ研究の成果が、感染症流行時の患者さん・ご家族の支援につながればと思っています。今後も研究者、教育者として、少しでも社会に役立つことができるように取り組んでいきます。